

# 知的障害特別支援学級における大学生の教育実習に対する 効果的な指導の在り方

笹倉 美代 ・ 船橋 篤彦\*

## 1. はじめに

### ●教員養成の現状

文部科学省(2021)は教育実習の目標を、「観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。」また、「一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。」と示している。

### ●研究の目的

広島大学附属東雲小学校及び中学校(以下、「本校」)には、知的障害特別支援学級が設置されており、数十年にわたり教育活動を行うとともに、附属学校の使命でもある教育実習校として、学生に対して実践的指導を行っている。

広島大学には附属特別支援学校が設置されていないこともあり、現在では、公立特別支援学校(以下：特別支援学校)での実習(2週間)を前に本校特別支援学級での1週間の教育実習が行われている。本校特別支援学級では特別支援学校での実習を前に1週間で児童・生徒の見取りや授業に対する基本的な考え方、実際の指導法などを教育実習の内容として取り扱っている。

1週間という短い期間で、生徒とのかかわりを持ちながら生徒実態を見取り、実際の指導法を指導するには、実習期間が始まる前のオリエンテーション時及び事前の指導案添削時、実習期間中に要点を絞った実習生指導が必要であると考え。そこで、本研究では、実習生へのアンケートを基に、本校での実習を通して実際に実習生はどのような力が身についたと感じているのかを検討する。また、どのような実習指導が効果的であったのかを考察する

## 2. アンケート調査について

アンケートの質問項目は以下の通りであった。実施する3回のアンケートでは、毎回同様の質問項目で、アンケートを実施した。

質問1. 授業の題材選び・教材研究をするときに、どのようなことに気を付けましたか？

質問2. 授業の「導入」「展開」「まとめ・振り返り」を構想するときに、どのようなことに気を付けましたか？

2-1. 「導入」                      2-2. 「展開」                      2-3. 「まとめ・振り返り」

質問3. その他に気を付けたことはありますか？

\* 広島大学大学院人間社会科学研究科

Miyo SASAKURA, Atsuhiko FUNABASHI

A Study on Effective Education Practicum for university students in a class for special needs students with intellectual disability

実習生へのアンケート及び実習に関わる指導は表 1 のようなスケジュールで実施した。

表 1 実習指導とアンケート調査のスケジュール

計画	実施時期
教育実習オリエンテーション (本校)	8 月 4 日
実習生へのアンケート①	9 月上旬
指導案添削 * メール, オンライン会議により実施 * 計 10 回程度のやりとり	9 月上旬～下旬
本校における教育実習 ・ 指導案添削 ・ 模擬授業 ・ 教壇実習	10 月 3 日 (火) ~ 6 日 (金) * 期間中に 1・2 回教壇実習
実習生へのアンケート②	10 月 6 日 (金)
特別支援学校実習	10 月 12 日 (木) ~ 10 月 25 日 (水)
実習生へのアンケート③	10 月下旬

#### 4. アンケートの回答からみられる実習生の変容

##### 4-1. 生徒との対話に対する意識向上

本研究では, 主にアンケート①とアンケート②を基に考察する。

教育実習の前後 (アンケート①②) を比較すると, 教育実習前では, 生徒との対話や生徒とのかかわりについてイメージしている実習生がほとんどいなかったが, 表 2 のように, 実習後は意識している実習生がほとんどであるということが分かった。

表 2 アンケートの一部抜粋 (アンケート②: 実習後)

<p>「導入」「展開」を構想するときに, どのようなことに気を付けましたか?</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (導入) 生徒が主体的に活動に取り組もうと思えるような声掛けを行うようにした。また, 活動の流れについての説明を聞くときに, 生徒が受け身にならないよう, 展開のテンポの良さや<u>生徒との対話を行うように工夫した。</u></li> <li>・ (展開) 十分に生徒が情報を読み取ったり, <u>教師に質問をしたりできるよう活動の時間を十分にとること</u></li> <li>・ (導入) <u>生徒の言葉を使って授業の流れを構成した</u>ことです</li> <li>・ (展開) <u>机間指導時, 生徒がどこでつまづいているのか, どこが分からないかを生徒との会話から聞いた</u>ことです。</li> <li>・ (展開) <u>一方的な説明にならないよう, 生徒と対話することに気を付けました。</u></li> </ul>
<p>その他に気を付けたことはありますか?</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>全ての生徒に声を掛け, コミュニケーションをとること</u></li> <li>・ <u>生徒の言動をまずは受け止め, 状況に応じて支援や指導を行うこと</u></li> </ul>

実習生は、授業観察をする機会が多少はあるものの、どのような授業展開にするか、どのような工夫をしているかという視点で授業観察をすることが多いと考えられる。その一方で、生徒の言動に対して、どうしてそのような言動をするのか予測したり、教師としてどのように対応するか考えたりすることは少ないと考えられる。

また、実習前に担当する生徒一人ひとりの実態について、筆者から詳しく伝えられているが、ほとんどかかわったことがない生徒の実態を的確に把握することが難しい。そのため、実習で行う授業を考えたときに、「どのような反応があるだろうか?」「生徒はどのように返答するだろうか?」と生徒の発言をいくつか想定するということが、実習生一人では難しい様子が見られた。

そこで、指導案添削では、生徒はどのような発言をすると思うかを考えさせるようにした。また筆者からも想定される生徒の言動について助言を行った。

模擬授業では、生徒役を筆者が行い、理解が不十分な生徒、すでに理解している生徒、様々な認知特性の生徒を想定して授業を行った。実習生は、様々な対応の仕方を実践した。例えば、言葉のみの指示理解が難しく、視覚的な情報の理解が得意な生徒がいる場合には、言葉だけでの説明ではなく、図やジェスチャー、指差しや教師の動きなどで情報を示すことを練習した。

教壇実習でも、実習生は、生徒全員が発言できる授業を目標にして授業を行ったり、机間指導で生徒全員に個別にかかわることを目標に授業を行ったりした。数パターンの生徒の言動を想定していたので冷静に対応でき、その結果生徒の理解が深まる様子を見て、実習生は達成感を感じることができたようである。

実習指導においては、生徒とかかわる時間が短い実習生が様々な生徒の言動をいくつか想定して授業を構想することができるよう、助言することが重要であった。また、「こういう発言を生徒がしたらどうする?」「早くできたら?」「時間内に終わらなかったら?」という様々な生徒の言動を想定し、どのように対応するか、どのような手立てをとるのか、知的障害や自閉症の障害特性、認知特性と紐づけながら、考えられる視点を示すことが必要だと考えた。

#### 4-2. 振り返り・評価の充実

実習前には表3のように実習生は、振り返り場面で、本時の目標が達成できたかどうかや自分の考えを各自で振り返ること、クラス全体で学習内容を確認すること、学習内容と生活との結びつきを意識させることなどの学習活動を想定していた。

表3 アンケート①(実習前)の一部抜粋

「まとめ・振り返り」を構想するときに、どのようなことに気を付けましたか?

- ・生徒自身が本時の目標を振り返ることができるようにすること
- ・本時の活動を、具体的な生活場面へとつなげる働きかけを行うことに気を付けました。
- ・「楽しかった」「できた」で終わらず、自分の考えを言葉にする時間を十分に取ること。
- ・活動したことが可視化(ワークシート)できるよう、全体で活動内容を共有する時間を設定したところ。

どのように教師が話すか、どのように問いかけるかは想定している様子が見えなかったが、生徒の返答までは十分想定できていないようであった。また、生徒は本時の内容が身についたのかどうか、どの程度身についたのかを教師が見取ることが出来るのかについては、不確かな状態であると考えられた。

また、最初に実習生が考えた数学の振り返りワークシート（図1）では、生徒の主観による評価はできるが、実際に距離を求めることができるかどうかといった、客観的な評価は困難であった。

<振り返り>			
★ 距離を求めることができる	できる	もう少し	できなかった
★ 時間を求めることができる	できる	もう少し	できなかった
★ 計算式を説明することができる	できる	もう少し	できなかった
年 組 名前: _____			

図1 数学の振り返りワークシート

図1のみならず、実習生の考えている授業のまとめ・振り返り場面では、生徒の発言を学級全体で共有する、目標の達成度を「できた・できなかった」や「◎・○・△」などで自己評価するような活動が多くみられる。

そこで、まず指導案添削や模擬授業で本時において生徒に身につけたい力は何なのかを焦点化するよう指導した。実習生は、学習活動に関しては、どのような授業展開にすれば生徒が主体的に活動できるか、学習内容に興味を抱き、思考を深めることができるのかを考え、授業づくりを行った。一方で、その活動で、どのような内容を学習させたいのか絞り込むことは難しかった。そのため、生徒の将来の生活や現在の学校生活などをイメージさせ、生徒はどのような力を身に付けたいかを考えて、身に付けさせたい力を焦点化させた。

また、3観点のどの観点で評価するのかを、改めて考えてもらった。本時では、知識を身に付けさせたいのか（知識・技能）、既習の知識を活用して思考・判断・表現させたいのか（思考・判断・表現）、他者と協力しながら主体的に学習に取り組んでほしいのか（主体的に学習に取り組む態度）、どのような授業をして、学習評価を行うのか、より具体的にイメージするように伝えた。これは、実習生が指導と評価の一体化についての理解を深めることにもつながると考えた。

次に、形成的評価の視点である。文部科学省（2016）の中央教育審議会答申にも「総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていく」とあるように、教師は学習の過程で形成的評価を行い、授業改善を行っている。加えて、生徒が学習の積み重ねを実感できるように工夫している。実習生にも、生徒に付けさせたい力が身についたのかどうか、どの程度身に付き、どういった点でつまづいているのかを見取るよう指導した。

結果として、表4のように、生徒自身の主観による評価のみならず、教師による評価を行うことや、振り返りの記述に対して教師が深ぼり（問いかけ）を行い、生徒の理解度や思考の過程を見取ろうという意識も感じられた。

表4 アンケート②（実習後）の一部抜粋

「まとめ・振り返り」を構想するとき、どのようなことに気を付けましたか？

・まとめ・ふりかえりでは、教師が全員の前で行う振り返りと、ワークシートを用いた振り返りの二つを行った。ワークシートを用いた振り返りについては、生徒が本時の学びを自分で振り返ることができること、生徒がワークシートを見てすぐに何をすべきか理解できること、教師が生徒の理解状況を把握できることの3つに気を付けた。

- ・本時の学びを生徒全員が振り返ったり、机間巡視において教師が深ぼりしたりすることができるように十分な時間を確保すること
- ・本時で何をしたのか、何が分かったのかを口頭で確認したことです。
- ・授業の理解度がわかるふりかえりを T 2 の学生に作成してもらったことです。

また、実習生の授業では、数学の振り返りワークシート（図 2）を実施した。こちらは、道のりと時間を求めることができるかどうかを、主観的に評価するのではなく、実際に問題に解答しながら理解度をチェックするように変更した。なお、理解が不十分な生徒がいた場合も想定して、解けなかった場合の支援についても準備していた。

教育実習は短期間で、授業が実際に行えるのも数回程度であるため、1 年間あるいは中学校在籍中にどのように生徒の力を伸ばしていこうかと考えている現役教師との視点が異なるのは当然だろう。実習生がより充実した授業の振り返りが行えるように、指導と評価の一体化、観点別評価、形成的評価の視点で実習生自身が自分の授業を振り返り、改善できるよう、実習指導をしていくことが必要である。

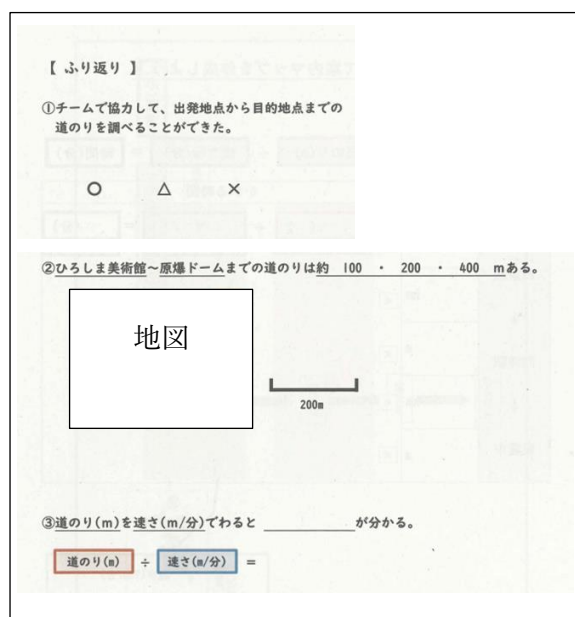


図 2 数学の振り返りワークシート

## 5. まとめ

アンケート調査とその考察から、実習生の変容として「生徒との対話に対する意識向上」と「振り返り・評価の充実」の 2 点が見られることが分かった。この 2 点は、どちらも実習生が実際に生徒とかわることができる教育実習だからこそ、実践可能な内容である。そのため、今後の実習指導においても、生徒との対話と振り返り・評価に重点を置き、指導する教員が実習生に助言を行うことが大切であろう。

「生徒との対話」においては、今年度の取組としては、生徒の言動を数パターン想定し、生徒の言動に対する効果的な指導について、知的障害や自閉症の障害特性と紐づけながら助言した。また、「ふりかえり・評価」においては、今年度は「指導と評価の一体化」、「観点別評価」、「形成的評価」の視点で助言を行った。

今後も、以上のような視点で実習指導を行い、短期間であっても実習生の教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力が身につくようにしていきたい。

## 6. 参考文献

文部科学省 (2021), 教育実習の意義や実施状況について. 文部科学省, 2021 年 7 月 9 日,  
[https://www.nii.ac.jp/event/upload/20210709-05\\_Mext.pdf](https://www.nii.ac.jp/event/upload/20210709-05_Mext.pdf)

文部科学省 (2016), 中央教育審議会答申「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」, 平成 28 年 12 月 21 日,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)